

## 開発援助実施地のカンボジア農村社会における食実践の予備調査

人間・環境学研究科 修士課程 1年

稲垣 美帆

カンボジア

2019年8月8日～2019年8月28日

### 計画の概要

本渡航は、修士論文作成にむけた研究の予備調査に位置づけられる。本研究の目的は、食の開発援助と受益者の「食を巡るズレ」を、後者の論理の再編成という観点から捉え直し、この再編成において「食べる」という行為が現地社会にもたらす変容を明らかにすることである。カンボジア農村における開発援助では、朝食配給など、しばしば「食」を媒介とした支援が見られる。先行研究は、食糧物資などが開発援助側の意図とは異なる用途で扱われるようになるなど、現地社会の人々の間で生成される新たな実践を報告している。しかし、食は「モノ」であることに留まらず、その周りで育まれる人間関係や価値観・理念などとも密接に関わる現象である。以上の考察から、本研究ではフィールドワークを中心的な手法とし、食の開発援助がもたらす「食べる」という現象における変容を、対象地の人々の食卓から村内の人間関係を丁寧に追うことで描き出す。

本計画は、調査対象地の選定とフィールドワークの実施を目的としていた。調査候補地は、食に関わる開発援助が実施されるカンボジア農村地域である。調査候補地は3つあり、物理的な食糧支援もしくは食料加工品研修などの技術支援を行う、1)国際連合の出先機関、2)他国政府の開発援助の実施機関、3)NGOのいずれかの活動地から選択した。調査目標は、住民と開発援助推進者との関係性と食生産・消費の実態を把握することであった。そのため、調査地が選定された後には、開発援助実施地の一般家庭で滞在しながら、住民と援助活動との接触機会・住民の日常的な食生産と消費活動への参加を計画していた。

### 成果

#### ○開発援助関係者との面会とカンボジアにおける食の援助の実態

同国において、栄養教育と給食支援の普及活動を行う日本のNGO関係者と面会した。その結果、食に関わる支援の全体的な流れとしては、内戦直後から始まった物質的な食糧支援から、徐々に栄養教育に移行しているということが分かった。今日の同国向けの食糧支援である給食支援は、依然として行われているが、様々な援助組織が各地でバラバラに活動しており、他国（日本や米国）から物資を運ぶ場合もあれば、現地で手に入る資源を活用するという試みもなされている。近年の動向としては、後者に比重が置かれるようになり、国連の

関心は「物資から技術へ」移行しつつあるという説明であった。さらに、2017年に初めて食生活指針（ピラミッド）が作成され、政府が2025年から公立学校で開始するとしている栄養教育は、現在、その教育者の育成ですら開始されていないという状況である。そのため、もし「栄養」という思想が流入することで、村人の食の在り方がどう変化するのか（しないのか）を見たいのであれば、今後5年から10年の時間が必要という意見をいただいた。

#### ○村人への紹介

滞在中、調査地実施の大前提となる、友好関係構築に努めた。まず、都市部で友人を作り、何度も面会して自分の研究関心を説明し、雑談をする中で信頼関係を築いていった。その内、自分の家族が住む村に案内しようと申し出てくれる者が現れた。その結果、都市部からトゥクトゥクで1時間ほど走った、中都市の市場近くの村に訪問することができた。拙いクメール語であったが村人と会話もできた。市場に近く、他国からの援助関係者もよく出入りする村であったことから、外から来た者に対して開放的な態度が印象的であった。案内してくれた友人は、もし長期で調査したければ、この村でもいいのではないかと提案してくれた。写真は案内人の母親が用意してくれた昼食である。ココナッツミルクとハーブやスパイスを混ぜた薫り高いスープでナスと白身魚を煮込んだもの、干し魚、魚の卵が入った卵焼き、そして白米。これが普段の食生活と同じものか違う物（つまり客人用）かは分からない。



#### ○寺院への訪問

タイとの国境近くのプレアヴィヒア州にて、ある寺院に数日間通った。国民の90%が上座部仏教徒であるカンボジアにおいて、寺は村の中心的存在である。僧侶たち、そして訪れる村人とも顔見知りになり、農村社会の生活を理解する上で重要な信仰の実践に触れた。さらに、月に4回とされる仏日に居合わせたために、村人が手をかけて調理し持ち寄った寄進物も味わうことができた。今後、家庭の日常の食と寺院の食あるいはハレの日の食との連続性・不連続性を、不可避免的に観察することになるだろう。



### ○今後に向けて

カンボジアの食の開発は現在、大きな転換期にある。それは、物資から技術へ、そして、食糧から思想（知識）へ、というものである。外部からもたらされる「栄養」という食べ方に関する一種の基準が、今後、農村に浸透していくことは必須である。しかし、今調査を開始するのが難しいという現実は認めざるを得ない。これらの反省を踏まえ、まずは、現在の農村の「食卓」を巡ってどのような人間関係が構築されているのか、また、人々はどのような論理で日々の食べ物を選択し、食べ物と自らの関係をどのように考えているのかという点について、丁寧な調査を行うことから始める。今回の渡航で得た知見を文献調査でより精緻化し、次回以降の現地調査では、構築した関係性を頼りに村での長期滞在を試みる。